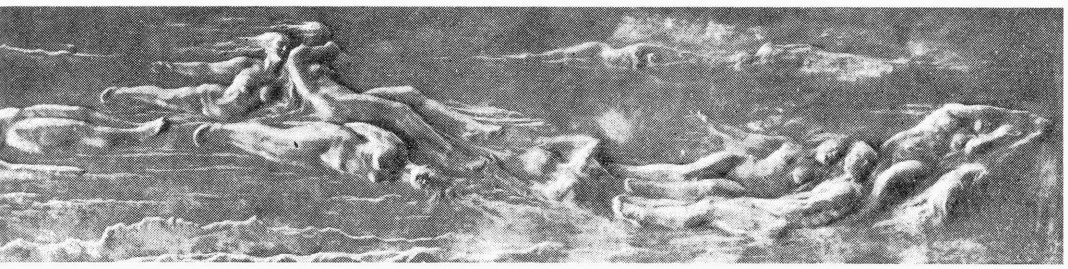
ISSN 0582－4478

京都大学附属図書館報



静脩

1995年9月

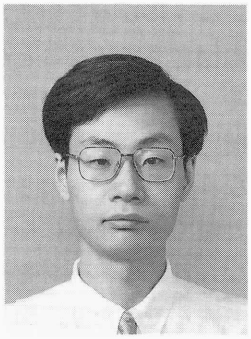
The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 32, No.2

利用者からみた大学図書館システム

京都大学大学院工学研究科
助教授 石 原 慶 一

1. はじめに



図書館はあらゆる情報を提供する場であり大学には必須の施設である。利用者は学生であったり，教育者であり研究者でもあるところの教官などである。最近，京都大学の附属図書館が土曜日，日曜日も開館になりたいへん便利になった。さらに将来は自動図書館，電子図書館へと新しい形態でのサービスに期待が寄せられるところである。新しい図書館ではサービスを提供する図書館側もそれを受ける利用者側もたいへん便利になることであろう。しかし，すべての分野が新しいシステムに置き換えられるとは思えない。従って，新しい方式と旧来の方式が混在せざるを得ないのではなかろうか。ところが，利用者は一度便利な状況に慣れてしまうと今までさほど問題とも思われなかったことが非常に煩わしく感じられるのである。これらに加え，近年では必要とする情報量も増えている。このような状況下で如何に上手に情報を集めるか，また図書館システムはどのように機能すべきかについて考えてみたいと思う。

2. 利用者と図書館

ある本が読みたいとき，まず，京都大学がその本を所蔵しているかどうかを検索する。また所蔵しているとすれば学内に60余ある部局図書室のうちどの図書室にあるかを調べる必要がある。従来なら，附属図書館の目録カードを調べなければならなかったが，最近はOPACを利用して自分の部屋にいながらにして調べられるのでその点では便利になった。しかし，OPACで目的の本がないことがわかったとしよう。その場合本の発行年が1985年以前のものはまだ目録が入力されていないので，目録カードを調べなければならない。そうして，目的の本の所蔵がようやくわかるのである。OPACに登録されているものについては目録カードがないので両方見なければならない。OPACは一見便利なシステムであるが，現状では利用者登録が必要な点，利用時間に制限がある点，目録カードとの併用，貸出中かどうかわからないなど不便さはまぬがれない。

次に，附属図書館で本を借りようとすると，まずカウンターで開架図書かどうかを聞く必要がある。書庫にある場合は，昼休みは書庫にいれずもちろん貸出もできないし，貸出時に貸出カードに必要事項を記入しなければならない。開架図書なら利用者カードを提出すれば利用者が貸出カードに記入する必要はないのだが，これになれると貸出カードへの記入は煩わしい。せめて利用者カードの番号だけで済ませてもらいたいものだ。欲をいえば利用者カードを出せば掛員が請求記号を計算機入力して処理してもらえればオンラインで本が貸出中かどうかがわかって便利になる。

さらに返却時だが，閉館後は玄関前のポストに返却できるようになり便利になったが，開館時にはカウンターまで返却しなければならない。閉館後はあくまでも緊急避難ということであろうが，開館時のほうが手間がかかるのは事実だ。せめてゲートの外で返却させてほしい。

以上，色々と不便な点を書きつらねたが，ここで文句ばかりいうつもりはない。図書館側も予算面や人員面で苦労されているので利用者が協力できるところはすべきであると思う。しかし，サービスを受ける側の利用者はえてして怠惰になる一方であり，便利なことになれると少しでも手間ひまがかかると不便だと感じてしまう。今後，機械化が進むなかで，利用者に不便を感じさせないような図書館側の対応を切望するものである。現状において図書館が十分に利用されているかというとそのようには思われない。あふれる情報を取捨選択して必要な情報を得るにはそれなりの技術や手法を要するが，このような技術やノウハウは個々人に死蔵されていて，なかなか一般には公開されていないということもその背景にある。附属図書館においては，新入生のオリエンテーリングや館内ツアーなどいろいろと企画されているが，これは学部学生を対象とした一般的な図書館の利用法であり，これに加えて，大学院生を対象とした研究者としての図書館利用法（文献調査法）についても取り組んでいく必要がある。このような図書館利用者教育は高度化する将来の図書館システムではますます重要になり，より一層の充実が望まれる。

3.情報洪水

最近の論文数の増加は大変なものである。コピーをとってファイルし，保存していくといくらでも増える。量が増えれば必要なものを取り出すのに多大な時間と労力が要るようになる。最近は2次情報が多く流通していて，容易に文献検索ができ，必要な書誌事項を得ることができるので，図書館でオリジナルを見るほうが手元のコピーを探すより早い。従って，図書館はできるだけ多くの種類の学術雑誌を所蔵することが望まれるのであるが，実際には新しい学術雑誌の出版に図書の購入が追いつかないという点や経費節減のため各図書室の蔵書が重複しないようになっているため，必要な雑誌を一か所の図書室で読むことができなくなってきている。そこで，電子図書館が実現されれば，検索から閲覧までコンピュータの画面上で出来るようになり，いながらにしてさまざまな情報を得ることができるようになるであろう。しかし，従来なら雑誌のページをめくりながら専門外の記事も読んでみたり，図や絵などで印象づけられたりしたが，そのようなことは望めなくなるであろう。これらを克服するために論文形式を見直す必要があるのではないだろうか。従来の序論，本論，結論というような論文形式は紙を媒体としたとき適当であったが，現在はオンラインジャーナルなどメディアは紙から電子媒体へと変化しつつある。このとき，本当に従来の論文形式で良いのかどうか考える必要がある。

例えば，まず概要だけがあり，詳しく知りたいところを指摘すればその内容が瞬時に得られるようなハイパーテキスト化された論文形式やさらに進んで論理関係だけからなるプログラム言語のような記号化された論文形式などのほうが電子化された論文には向いているかもしれな

い。これらが実現し，さらに論文作成ツールが整備されれば書く側の負担も軽減されるであろうし，書く側と読む側が同じ言語である必要もなくなる。また，早く内容が把握でき読む側の負担も軽減されブラウジングしやすくなるのではないか。しかし，書くのが簡単になればますます情報量が多くなるかも知れない。情報の洪水を防ぐには，情報発信者である研究者が如何にうまく整理して情報を発信するか，情報を提供する図書館が如何にうまくそれらを集約するかを考えないとこのままでは折角の情報が埋もれてしまい，研究はもっぱら情報の発掘調査に終わるということにもなりかねない。

4. おわりに

情報を発信するのも，整理するのも，それを利用するのも所詮は人間である。情報インフラが整備されても，非整備されればされるほどそれを専門知識をもった図書館員やそれを利用する研究者が上手に使いこなさないと便利になるはずのシステム近代化が逆効果になりかねない。このような時代を迎えて，教官や図書館員の力量が問われているのではなかろうか。

図書館職員長期研修に参加して

国際日本文化研究センター資料課資料利用係長
今　井　淑　子（元附属図書館情報管理課）

1. はじめに

平成7年度文部省図書館職員長期研修に参加しました。全国の国公私立大学から集まった図書館職員が7月10日から3週間の間，東京及び筑波で講義や実習に汗を流しました。大変忙しいなかを，送り出してくださった附属図書館の皆さんに深く感謝します。ありがとうございました。宿題のレポートに少し手を加え報告に代えさせていただきます。

長期研修の中で「京都大学」の名前があちこちで引用され，そのたびに身のすくむおもいをしました。いわく，「資料の分散は最悪」「たこつぼ組織」「知識の棺桶」などなど。なにかと話題になることの多い京都大学ですが，その組織形態は「調整された分散」という言葉で表現されてきました。その歴史をふりかえり「大学改革における図書館の対応」というテーマを考えてみたいと思います。

2. 「調整された分散」のできるまで

京都大学図書館が設立されてもうすぐ100年をむかえます。『京都大学七十年史』を読んでみると，くり返し図書館組織のありかたについて改革が試みられた末に，やっとたどりついたのがこの「調整された分散」であることがよくわかります。

1887年「設立の暁にはむろん公開，誰人にても閲覧の便利をあたえ，我国西部の必要に応ずべし」との意気込みで設立された図書館の組織改革は1913年に始まっています。

「第9回商議会には総長臨席のもと，同総長のかねてよりの腹案であった本館への図書と事務の集中化について議論された。これは各学部，研究室には研究上不可欠の文献のみを置き，他の図書は可能なかぎり本館に集中することにより，収書と整理に合理的効果を与えようとするものである」と。

しかし，この提案は「結論をみるに至らず」

1929年ふたたび「第13回商議会では，各分科大学ごとに分置している図書を本館に集中し，分科大学ごとに定められている図書取扱規程を統一し，全学図書の整理・運用上の統一を行うため，総長みずから図書館新営案を提案した」

しかし，これも「議事が難航し」て決定できず，さらに第14回，15回商議会で同じ議題で審議されたが「活発な議論を呼んだにとどまり実現を見ることはできなかった。」とあります。

戦後になって，1948年「図書館制度の改正案」，1949年「図書行政の改善に関する案」，1956年「全学図書行政の一本化の問題」が次々と提案されていますが，いずれも実現しないままで，1961年「附属図書館に事務部制」が実施されます。「この機構改革の機会に，本学全体の学部・研究所の各図書室をも包含した図書行政の統合を目指してきたのであったが，結局これも附属図書館の枠内の改革にとどまった」といかにも残念そうな記録が残されています。

最後のチャンスは1964年です。「図書館近代化の問題は極めて深刻である。この際，本学図書館組織全体の機能，運営などを再検討し京都大学図書館の今後進むべき太いレールを敷くため」にと「図書館改善委員会」が設けられます。そして，長時間にわたる議論の末にまとめられたのが，「調整された分散」でした。集中か分散か77年の論争に決着をつけた大原則のおかげで，図書館組織についての議論は，商議会の記録からは全く姿を消してしまいます。

3.「調整された分散」の現実

この考え方の基本にあるのは，教育研究の自由のために大学の自治を保障するという憲法の精神です。あらゆる干渉や迫害を許さず反戦・自由・独立を尊ぶ気風がこんなに高等な図書館経営方針を産みだしたのではないでしょうか。

その後，図書館では，雑誌の所蔵場所を知るための『京都大学学術雑誌総合目録』が各編ごとに定期的に編纂されるようになり，利用の便利をはかるため「学内図書相互利用書」が作られ，また学内の図書館室それぞれに異なった図書委員会規則や利用規程をまとめた冊子が発行されるなど「調整」のための努力が続けられます。

しかしながら，それは理想どおりには機能していません。

私自身のことになりますが，公務員（一般事務）で採用され工学部の研究室に配属になり5年後に，教室図書室に移りました。司書講習を受けて図書職員になり，19年後の昨年に附属図書館に異動になりました。

はじめの研究室での5年間は，公務労働としては全く必要の感じられない仕事でした。(教授秘書などという職場が定員削減の進行とともに消えて行ったのは当然のことだったと思います)

それにくらべて，教室図書室での毎日は，とても充実感のあるものでした。

専門の教育は受けてなくても，長くいれば門前の小僧でなんでも答えられるようになります。一人職場ですから小回りもきく。頑張ってサービスに努めれば，それだけ利用者の反応もあって……「調整された分散」を旨とする京都大学の図書館組織の中で「私の図書室」はピカイチと誇りに思っていました。

ところが部局・教室で潤沢に定員をもっていた時代はおわり，教室図書室によっては，次々と閉鎖されたり縮小されるところも出てきました。また，目録さえもない消耗品で処理される本がふえ，重複雑誌の調整どころかユニークタイトルがいつのまにか購入中止になる……。学部図書委員会の試みも部局自治の前には効果なく，結局「調整」とは名ばかりの無法状態でネットワークはズタズタです。部局・教室図書室での仕事がとても不安で展望の持てないものに見えてきました。

また自分自身の思い上がりにも気がつきました。私の視野に入っているのは実はほんの一部のひいきのお客さんだけ，部局自治の囲いの中で好きな仕事だけをやっていい気になっている私は，まだ図書館天動説の時代にいました。利

用者と図書館との関係を，地動説の通じる今の時代にもってこなければならない。そのためには，図書館職員や図書館経営が，それぞれに分散したままの教授会などに従属していては駄目なのではないかと考え始めたのはその頃です。附属図書館へ来て組織の一員として仕事をしてみて，ますますそう確信するようになりました。

いわゆる調整が有効に機能しない原因は，理学部・工学部のように教室図書室の寄せ集めで実は分散状態というところ，旧来から部局図書室として確立しているところ，さらには大学の改革・改組の中でつくられてきた真空状態（図書室がなく図書職員もいない学部・研究科・センター・施設）のところとそれぞれ違うかもしれません。しかし，いずれにしてもこれまでのように言葉だけの「調整された分散」の中に逃げ込むことのない，図書館組織の構築が求められているのです。

4.将来構想にむけて

長期研修のなかで，まだまだ先のことと思っていたインターネットを使った電子図書館構想が，すぐに取りかからねばならない事業として提起されました。そして，目録情報の充実，ＮＡＣＳＩＳ－ＩＬＬの対応など相互利用の促進，さらには資料の蓄積よりも情報の発信基地としての役割を果たすようにと，強調されました。

また研修中には，いくつかの大学での組織改革の実例を聞く機会がありました。名古屋大学の工学部では今春，各学科に所属していた図書職員を学部図書掛の所属とし各学系図書室にはここから派遣の形をとるという組織改革を実現しました。これで，図書職員の流動性を確保し，サービスの均一化と業務の効率化を獲得し，大学院重点化への対応も可能にしたということです。遡及入力も進むようになったとか。

筑波大学では学系ごとのサービス掛を再編整備し，新たに図書館公開掛を設置しボランティアするなど大改革を行いました。サービスの充実のために必要と考えられることは全館の総意を集めて構想を練りやり遂げる熱意に感動しました。アイデアを出して実現出来ると楽しいですよと話されたのが印象的でした。

学内でも，事務機構改善検討委員会や附属図書館将来構想検討委員会が発足し，商議会のなかの専門委員会も動きだしました。整理業務の合理化と利用者サービスの窓口をいかに漏れなく適正に配置していくかが，ポイントになってくると思います。技術革新の流れと，現実の落差の大きさこそが，これまで無力感に陥ることの多かった図書館組織の見直しを急速にすすめる要因になるのかもしれません。

京都大学の場合「大学改革における図書館の対応」はこれからです。

「調整された分散」の理念を真に生かすためには，教官の自治の単位に従属させずに図書館員の創意を仕事に生かせる組織体制を確立すること，それでこそ教官をはじめ利用者の要求を正確に受けとめたサービスが出来るようになるのではないかと思います。

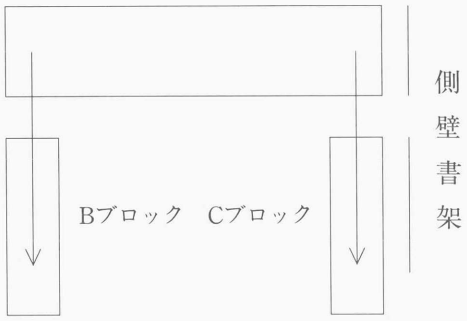
バックナンバー・センター（ＢＮＣ）整理作業について

昭和56年３月の商議会で設置が決まったＢＮＣ書庫は，増え続ける雑誌のために次第に手狭なものとなっており，場所によってはタイトルが集中し，排列の乱れや十分な配架スペースがとれないなどの問題が出てきた。

そこで，今回，館員が一丸となり，ＢＮＣ書架スペースの拡張を図り，同時にアンバランスな配架を見直して，雑誌の適正配置を行った。

作業を行ったのは地下の下図の範囲で，Ａブロック（161列，16万冊）の雑誌をＢブロック（22

列，2万冊　和雑誌先頭側から)，Cブロック(13列，1万冊　洋雑誌末尾側から）に延長して配架する，というものである。また，大型本については，側壁書架に別置することで対応することにした。



1.作業内容

作業内容は，準備段階から実際の移動作業まで，およそ4段階に分かれる。

(1) 棚配置現状調査（6月中旬～7月中旬）

新たな配置図を描くためには，まず現在の雑誌の配架状況を把握しておかなければならない。調査したデータは，以下の3点である。

ＢＮＣ番号ごとに，その雑誌が現在占めている幅を記録する。

新配置においては，ある程度の増加分を見込んだスペースを確保する必要があるため，その基礎となる年間の増加幅をＢＮＣ番号ごとに記録する。

大型本については，別置によって対応するため，規準となる大きさ以上のものを高さを計って記録し，区別できるようにする。

これらのデータは，機械処理によって棚を割付ける際の基礎データとなるものである。

(2) データ入力作業（～7月25日）

調査して得たデータを機械処理するための入力作業を行った。これは，データベースに登録されているデータからＢＮＣ番号と継続記号(＋)のみを出力したファイルに追加入力するという方法をとった。データ件数は，和雑誌で4,605件，洋雑誌で4,459件であった。

(3) データ編集・計算処理（～8月4日）

入力されたデータを集計し，それをもとに，現状の分析を行った。今後の受入れ態勢，配架要領などがこれによって決定される。主な集計結果は以下に示すとおりである。

まず，現段階における書架の使用分は6,369段，拡張分を含めて残りの空き棚は3,517段である。また，継続タイトルの年間増加分が255段である。これについては，5年分を見込むこととした。なお，一連につき，和雑誌は6段，洋雑誌は5段に組むこととして計算をしている。

こうして立てた見込みをもとに，棚の割付を機械処理によって行った。移動作業の際必要とされる項目として，ＢＮＣ番号ごとに新配置場所の列・連・段と，棚の左側から何cmのところに当該タイトルの先頭が位置するかという数値の4種類を計算させることにした。移動作業時の混乱を防ぎ，できるだけ作業が機械的に行えるようにと配慮した結果の項目である。最終的に，和雑誌を85列（8万冊）洋雑誌を111列（11万冊）に配分することになった。

(4) 移動作業（8月7日～15日：夏季休館中）

作業は，上記の項目をＢＮＣ番号毎に打出したスリップを，1枚1枚現物に添付し，スリップの表示に従って雑誌を新配置場所に移動させていく，という方式をとった。この方式がもっとも効率的と判断したためである。また，移動したあとの棚を新配置用に揃える作業も並行して行った。作業割当は，1日5時間（午前／午後)，2人一組で和，洋雑誌それぞれ3～4組で，附属図書館全職員が交替で行った。

2.まとめ

いくつかデータの誤りがあったが，おおむね計画どおりの再配置を行うことができた。

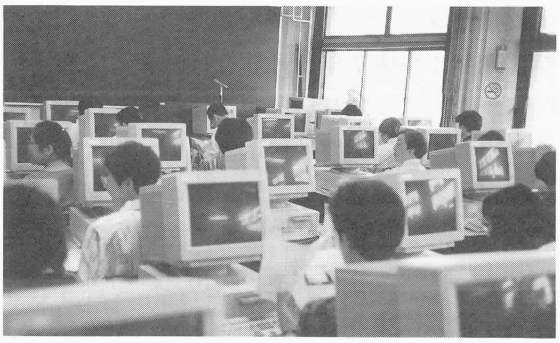
残された作業としては，現状調査によって明らかになった，データベースに登録されていな

い雑誌データの入力がある。できる限り速やかに行う予定である。

なお，今回の作業で拡張スペースに割当られたＢ，Ｃブロックは，ＢＮＣ第一次搬入時における重複雑誌を仮置きしていたスペースであり，それら重複分を別ブロックへ移動することによって設けられたものである。その作業は平成６年から７年度にかけて行われた。

その他，ＢＮＣについては，未整理の搬入分について，ＢＮＣへの組み込み，重複雑誌の不用決定の手続き等の処理が残っている。

京都大学インターネット講習会



実習会場

学術情報の流通手段として，インターネットの関心と重要性はますます高まりつつある。今や研究者のみならず教育研究を支援している職員もインターネットを自由に使いこなすことが職務上要求されている。このため，インターネットに関する最近の動向を知り，利用に関する基礎的な技術を習得していただくことを目的として，学術情報ネットワーク機構・附属図書館・大型計算機センター・情報処理教育センターとの共催で，井村総長（機構長）の挨拶に始まり，講義と実習が次のとおり開催された。

日時：平成７年９月18日(月)
　　13：00～16：00
　　９月19日(火)
　　９：00～12：00
　　13：00～16：00
　　９月20日(水)
　　９：00～12：00
　　13：00～16：00
会場：農学部講義室W-100（18日）
　　情報処理教育センター講義室
　　（19・20日）

参加者は図書館職員・一般事務職員及び技術職員等290名であった。全体講演と実習から構成され，実習は60名ずつに分かれ，19・20日の両日のいづれかの午前又は午後に受講した。

平成７年度秋季展示会

本年度，附属図書館の秋季展示会及び講演会は総合人間学部との共催で，下記の予定で準備が進められています。

＜展示会＞

テーマ　：　「舎密局から三高へ」
開催期間：平成７年10月16日(月)～
　　10月27日(金)
　　12日間（土日開催）
会　　場：附属図書館展示ホール（３階）
展示内容：
　パネル展示
　旧三高関係史料約40点を写真パネルで展示

機器展示
総合人間学部所蔵の物理実験機器等約30点
その他，史料，校印，蔵書印等。

＜講演会＞

講　師：大学院人間・環境学研究科
教授　海原　徹

演　題：「京都大学百年―創設のころ」
日　時：10月24日(火)
午後１時30分より
会　場：附属図書館ＡＶホール（３階）
展示会・講演会とも無料

平成７年度国立大学図書館公開事業

国立大学図書館が所蔵する貴重書等文化財を全国に巡回して公開し，大学図書館の地域公開に寄与し，大学図書館の大学内外での理解を深めることを目的として，平成７年度より実施されるものです。本年度は長崎大学等所蔵の古写真のパネルを，下記４地区で巡回展示します。なお，期間中，関連講演会も併せて開かれます。

テ ー マ：幕末・明治期日本古写真展－忘れられた日本の風景・風俗展
主　　催：国立大学図書館協議会
開催地区：近畿地区　京都大学附属図書館
東海地区　名古屋大学附属図書館
東京地区　東京大学附属図書館
東北地区　東北大学附属図書館

近畿地区開催
実施機関：京都大学附属図書館

＜展示会＞

開催期間：平成７年11月６日(月)～
12日(日)　７日間（土日開催）
会　　場：附属図書館展示ホール（３階）
展示内容　地域に密着・関連した写真
幕末・明治期の文物の展示
写真パネル約100枚
電子情報による展示
画像データベースとして関連史料を公開

＜講演会＞

講　師：国際日本文化研究センター
助教授　白幡　洋三郎
演　題：「写された幕末・維新」
日　時：平成７年11月８日(水)
午後３時～４時30分
会　場：附属図書館ＡＶホール（３階）
展示会・講演会とも無料

共同研究室の閲覧利用について

当館では，学期末試験期間中，１日の入館者が，4,000人を超える日があり，現在の１階・２階の閲覧席742席では対応しきれず，席を確保できない利用者から苦情が出されていました。本年９月より当館では，京都大学附属図書館共同研究室利用規則に基づく申請による利用がない時には，試験期間中に限り，共同研究室１・２（36席）を利用者の閲覧利用に供することとなりました。

図書館のうごき(1)

海外視察報告：「米国における大学図書館事情と電子図書館の動向」

平成７年６月26日(月)11時～12時

附属図書館長の報告が全学図書館員を対象にして，ＡＶホールで開催された。

ＮＥＥＤＳ／ＷＳデモ

平成７年６月28日(水)

新聞記事検索システムのデモ

平成７年度 目録担当職員システム研修

平成７年７月３日(月)～７日(金)

学内で図書・雑誌の目録作業担当者を対象とする研修会で，10名が参加した。

平成７年度 商議会専門委員会

第４回

平成７年７月３日(月)

第５回

平成７年７月18日(火)

「次期システムにかかる懇談会」

平成７年８月２日(水)

第６回

平成７年９月26日(月)

平成７年度 第１回　商議会

平成７年７月19日(水)

平成７年度 第１回　選書分担商議員会議

平成７年７月19日(水)

部局図書系掛長会議

平成７年７月21日(金)

部局端末システム担当者会議

平成７年７月27日(木)

次期システム検討委員会

平成７年７月31日(月)

附属図書館の部長・課長・専門員・掛長からなる当検討委員会で京都大学附属図書館新システムについて検討された。

廃棄図書整理作業

平成７年８月３日(木)

オートメーション研究施設等の不用決定済みの図書の廃棄作業が全館員で実施された。

バックナンバーセンター整理作業

平成７年８月７日(月)～15日(火)

作業内容は５頁参照

平成７年度第１回 図書館情報システム特別委員会 目録システム専門委員会

平成７年９月５日(火)

平成５年度・６年度活動報告のあと平成７年度活動方針について議論がなされ，次の事が決まった。

1）目録データ作成に関するアンケート集計結果報告書は回答機関に配布する。

2）最終報告書のとりまとめ分担は次のとおり

目録講習会……阪大

遡及入力……神大

中国語資料……京大

全体のまとめ…京大・滋賀医大・奈良教

図書館のうごき(2)

ＪＯＩＳ講習会

平成７年９月６日(水)

図書館職員を対象として開催され25名が参加した。

ＮＡＣＳＩＳ-ＩＲ地域講習会

平成７年９月12日(火)～13日(水)

本館４階地域共同利用室において，学術情報センターとの共催で，ＮＡＣＳＩＳ-ＩＲ地域講習会が開催されました。学術情報センターから木村，樋口両氏が講師として来館され，本館の５名の職員が講師補助者としてインストラクションを助け，愛媛大，香川医科大，奈良女子大，国際日本文化研究センター，同志社大から各１名，本学から５名が受講し，熱心な講習が展開されました。第１日目には，講習の終了後懇親会が開催され，講師，補助者，受講者を交えた交流が図られました。

京都大学インターネット講習会

平成７年９月18日(月)～20日(水)

詳細は７頁参照

部局図書系掛長会議

平成７年９月22日(金)

目録システム地域講習会

第１回　10月24日(火)～26日(木)

第２回　10月24日(火)

10月31日(火)～11月２日(木)

10月24日午前中の講義は第１回・２回合同で行い，10月31日は午後から開催される。

全国共同利用図書資料（大型コレクション）のご案内

このたび下記大学図書館より，全国共同利用資料（大型コレクション）について利用案内が送付されて来ましたので，お知らせいたします。

なお，コレクションの内容につきましては，附属図書館参考コーナーにリストがありますので，ご参照下さい。

茨城大学附属図書館

「英国外務省文書：日本関係コレクション(Foreign Office File : Japan Correspondence, 1905-1945)」

＊内容明細あり

神戸大学附属図書館

「ベルギー・オランダ経済史コレクション」

＊内容明細あり

上越教育大学附属図書館

「赤外・ラマン分光分析データ集」

＊内容明細あり

寄贈図書資料紹介

📖 医学・生命科学　論文作成 Macintosh
／金子　周司（薬学部）

📖 Fluorine-carbon and fluoride-carbon
／中島　剛　（工学部）

📖 Das Bild von Mensch und Natur im #21.
／竹市　明弘（人間・環境）

📖 バーブル・ナマの研究1（校訂本）
中央アジアの歴史
内陸アジア（地域からの世界史6）
／間野　英二（文学部）

📖 京都大学音楽部交響楽団七十五年史
／京都大学音楽部交響楽団

📖 人文学のアナトミー
／阪上　孝（人文研）

📖 洛北岩倉誌
／相良　直彦（人間・環境）

📖 Game Theory and Social Choice
ゲーム理論と社会選択　中村健二郎遺稿集
鈴木光男編
／岡田　章（経済研）

📖 木のメカニズム
／佐道　健（名誉教授）

📖 重度心身障害児の発達と療育対象的活動の高次化に基づく発達の階層構造理論の展開
／田中　真介（総合人間学部）

📖 実践的健康学考
／小川　隆三（名誉教授）

📖 中國古代禮制研究
／小南　一郎（人文研）

📖 Frontiers of Photobiology

📖 ポピュラー・サイエンス
稲のきた道

📖 万葉集にみる酒の文化・万葉集からみる食の文化

📖 生物学からみた子育て

📖 味と匂いのよもやま話・血液と健康・恐竜学のすすめ

📖 鍼灸への招待・地球と人類は持続するか

📖 院内感染を防ぐ

📖 魚の世界・真珠物語・マリンバイオの未来

📖 ショウジョウバエ物語・アサガオ

📖 江戸の贈り物
以上10冊
／武部　啓（医学部）

📖 終戦五十周年記念誌　あの時わたしは
／羽田　宏（名誉教授）

📖 China's Livestock and Related Agriculture
／宮崎　昭（農学部）

📖 Proceedings of The 2nd International Conference on Multiphase Flow '95-KYOTO
April 3-7 1995 vol.1-4
／芹澤　昭示（工学部）

📖 岩波講座　情報科学7・8・21

📖 岩波講座　ソフトウェア科学　14

📖 情報工学基礎講座　1
ほか273冊
／長尾　真（工学部）

目　次

＜巻頭言＞

・利用者からみた大学図書館システム……1
・図書館職員長期研修に参加して……3
・バックナンバー・センター（BNC）整理作業について……5
・京都大学インターネット講習会開催……7
・平成7年度秋季展示会……7
・平成7年度国立大学図書館公開事業……8
・共同研究室の閲覧利用について……8

＜図書館の動き＞

・海外視察報告「米国における大学図書館事情と電子図書館の動向」……9
・NEEDS／WSデモ……9
・平成7年度目録担当職員システム研修……9
・平成7年度第4・5・6回商議会専門委員会「次期システムにかかる懇談会」……9
・平成7年度第1回　商議会……9
・平成7年度第1回　選書分担商議員会議…9
・部局図書系掛長会議……9

・部局端末システム担当者会議……9
・次期システム検討委員会……9
・廃棄図書整理作業……9
・バックナンバー・センター整理作業……9
・平成７年度第１回
　図書館情報システム特別委員会
　目録システム専門委員会……9
・ＪＯＩＳ講習会……10
・ＮＡＣＳＩＳ-ＩＲ地域講習会……10
・京都大学インターネット講習会……10
・部局図書系掛長会議……10
・目録システム地域講習会……10
・全国共同利用資料（大型コレクション）
　のご案内……10
＜寄贈図書資料紹介＞……10
・目次……11
・図書館カレンダー……12
・後記……12

図書館カレンダー

9月10日(日)　日曜開館再開
9月11日(月)　夜間開館再開
9月15日(金)　休館（敬老の日）
9月18日(月)　長期貸出返却日
9月23日(土)　休館（秋分の日）
10月２日(月)　休館（月末休館日）
10月10日(火)　休館（体育の日）
10月16日(月)～27日(金)
　平成７年度秋季展示会
10月24日(火)　展示会講演会
10月31日(火)　休館（月末休館日）
11月３日(金)　休館（文化の日）
11月６日(月)～12日(日)
　平成７年度国立大学図書館公開事業展示会
11月８日(水)　展示会講演会
11月23日(木)　休館（勤労感謝の日）
11月30日(木)　休館（月末休館日）

後記

本年４月１日付で受入掛長となった田中藤雄氏が７月に急逝された。一同謹んで哀悼の意を表したい。館員全員非常なショックを受けてから，はや２ケ月がたったが，まだ心のどこかにモヤモヤしたものを持ちながら，ショックから立ち直ろうとしている。遺児育英資金の募集にぜひご協力をお願いしたい。

今号のテーマは利用者サービスについて原稿をお願いした。次号も同じテーマで編集しようと考えている。　（モ）

京都大学附属図書館「静脩」
Vol. 32,　No.2（通巻119号）
発　行：1995年６月30日
編　集：静脩編集委員会
（責任者　附属図書館事務部長）
発　行：京都大学附属図書館
京都市左京区吉田本町
TEL 075-753-2613